連載・青少年健全育成シリーズ　第294回

「メダカが姿を消すということ」

わたしたちの身近にいる生きものたちが、いま次第に姿を消しつつあります。たとえばメダカがそうです。メダカは体長3センチから4センチほど。春から夏にかけて産卵しますが、水田に水を張る時期とメダカが産卵する時期とは重なっていて、長いあいだ日本の稲作の文化と共存してきた魚の代表といえるでしょう。稲作をしているかたの話によると、都留市でもむかしは水田や用水路にたくさんいたようです。メダカが生息するためには、産卵しやすいような浅く水温の高い水田や穏やかな流れのある用水路、卵を産みつける水草などが必要ですが、現代はメダカにとってけっして住みよい環境ではありません。これは都留市に限ったことではなく、すでに山梨県でも絶滅の危険の恐れがある生物に指定されています。

メダカのほかにも都留市で姿を消しつつある生きものがいます。トノサマガエルがそうです。このカエルも水田に卵を産みますが、近年、鳴き声を聞くことができるのは限られた場所だけになってしまいました。湧き水や山間部の渓流などきれいな水と関わりが深いカジカも近年、一部の場所を除いてほとんど姿を見かけることはありません。春の到来とともに麦畑などで声が聞かれたヒバリも、今ではその賑やかなさえずりを聞く機会は少なくなりました。

ところで、今でも世界の研究者たちが新しい生物を発見しては名前を付けています。まだ発見されていない生物を含めると、地球上には約一〇〇〇万種の生物がいるとも言われていますが、現在までに確認され名前が付けられた生物は二〇〇万種に届きません。しかしこうしたまだ名前も知らない生きものを含めて、地球上で多くの生きものたちがいま急激に姿を消し始めているという報告があります。ある研究では、一〇〇〇年前には一〇年で一種だった絶滅のスピードが、一〇〇〇年前には一年で一種、現在では一日に約一〇〇種になっていると推測されています。つまり現在、地球上では一年間に四万種ほどが姿を消している、という計算になるのです。

メダカだけでなく、トノサマガエルもカジカもヒバリも、むかしから教科書や多くの歌や詩に登場してきました。それだけ私たちの暮らしに馴染みが深く共存の文化を育んできたという証でしょう。生きものが地球上から姿を消すということは、永遠にその生きものと出会えなくなるということです。次の世代の子どもたちがメダカという言葉を聞いても、その実物を思い浮かべることさえできなくなるかもしれません。それは、私たちが長い時間をともにすることで培ってきた生きものとの共存の知恵や文化も、この地域から消えてゆくということを意味しているのです。

青少年の声かけあいさつ運動の推進
『大人も子どももすすんであいさつをしよう』

毎月第１日曜日は「家庭の日」
毎月第３日曜日は「青少年を育む日」です。
青少年育成都留市民会議編集委員

広報「つる」広告募集！

あなたのお店の広告を広報つるに載せてみませんか？
広報「つる」は、都留市内の各家庭に配布されています（10,500部発行）ので、多くの方の目に触れます！

問合先：総務課　法制広報担当

広告料金

掲載場所	印刷色	金額 / 枠	備考
裏面	カラー	20,570	2カ月掲載
内面	2色刷り	10,280	2カ月掲載

掲載月は、①1・2月②3・4月③5・6月④7・8月⑤9・10月⑥11・12月の６パターンとなります。
掲載状況は、下記をご参考としてください。
また、詳細につきましては、ぜひお問い合せください。

広　告　掲　載　欄

広　告　掲　載　欄